広報たかしま
平成23年8月号
No.139

高島市 No.80 歴史散歩

自然とともに生きる

高島市は、東部の琵琶湖岸を除く三方向が山に囲まれ、知内川、百瀬川、石田川、安曇川、鴨川等の大きな川が琵琶湖に流れ、その流域には豊かな土地が開けています。

また、市街地はJRの駅を中心に広がっていますが、山岳地帯や森林地帯、田園地帯、湖岸地帯に大きく区分することができ、「自然」豊かなまちといえるでしょう。

しかし、この「自然」は、人の手が加わっていない自然なのでしょうか。

そうではありません。この「自然」は、私たちの先人たちが、自然の脅威にさらされながら、生活の安定や向上のために、森林や原野を切り開き、土地の形を変え、現在の姿になったものです。これは、私たちの先人たちが残してくれた「宝物」といえます。

ここでは、市内有数の川のひとつである安曇川を例にとりましょう。

安曇川は、幾度もの洪水のたびにあちらこちらと流れを変えながら、上流から運ばれてきた土砂などを堆積し、下流に大きな三角州をつくってきました。

安曇川は、人々の生活に大きな被害をもたらしてきましたが、その一方で、なくてはならない存在でもありました。先人たちは、厳しい自然条件のもとで、この安曇川を利用し、その恵みに感謝をし、安曇川とともに生きてきました。

その一例として、災害防止の為の植林から出発して、今日の伝統産業の一つになった扇骨づくりがあげられます。

扇骨とは、扇子の骨の部分のことで、『新旭町誌』や『安曇川町史』によると、江戸時代中期に現在の新旭町太田の長谷川玄斎が、堤防補強のために水防用として竹を植えることを農民に勧めたのがはじまりとされています。

その後、同町新庄の戸島忠兵衛が植林を勧める一方、農閑期の副業として扇骨づくりを農民に勧め、自らも販路開拓を行ったといわれています。

現代に生きる私たちも、自然の脅威を受け止め、それを巧みに利用してきた先人たちの歴史を学びながら、住みよいまちづくりを考え、行動していきたいものです。

※ここで記述した「先人たち」とは、特定の人物ではない、一般民衆のことをいいます。

（文化財課）

編集者のつぶやき

「あきらめない気持ち」が生んだサッカー女子ワールドカップの優勝。なでしこジャパンの大活躍に胸が熱くなられた方も多いと思います。このようなアツサは大歓迎ですが、この夏の猛暑は早く過ぎてほしいものです…。今年もステテコや、クレープシャツなどを活用し暑い夏を乗り切りたいと思います。節電の協力も大切ですが、くれぐれも、熱中症にならないよう無理をされないようお願いします。（広報担当S）

■発行／高島市　編集／政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740（25）8000㈹
http://www.city.takashima.shiga.jp
t-info@city.takashima.shiga.jp

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用。
PRINTED WITH SOY INK 大豆インクを使用しています。